

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2012年2月 第34号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email : himei-y@oregano.ocn.ne.jp

梁 熙 梅(やん・ひめ)

春を待ちつつ

今年は雪が多く、日本全国で多くの方々が被害に遭い、命を失うような大きな事故も多くありました。関東の方もいつもの冬より寒かったです。インフルエンザも流行り、息子の学校でも学年閉鎖があったりして、今年の冬はそれぞれたいへんな思いで過ごされたことと思います。シオン通信を読まれるみなさまは、神さまのみ手に守られ、寒い冬の中でもお元気で過ごしてこられたことと存じます。

2月22日の水曜日より四旬節に入り、私たちの教会ではリレーの断食の祈りが始まりました。教会では初めて行う断食の祈りですが、四旬節の四十日間、教会の共通課題を担い合って祈りますし、個々人が抱えていることも一緒に祈ります。初めてのことで、みんな祈ることに喜びをもって加わっています。感謝です。

私は、2月13日(月)～16日(木)の旅程で、日韓宣教協力の一環で教団のメンバーと一緒に韓国ルーテル教会を訪れることができました。二日間は韓国ルーテル教会の神学校で開かれている教職者会に出席しましたが、食べるときと寝るときのほかはすべて勉強！でした。神学校を卒業し久しぶりに、いいえ、神学校で学んでいたよりいっそう厳しく、勉強をしてきました。少しきつかった^^；最後の一日は、神学校から車で3時間ほど離れた地方に行ってきました。議長のオム先生が、地方でベテル聖書勉強会を開いておられ、そこで日韓宣教協力についての話し合いがなされたためです。しかし、車の走る道路にスピード防止のために設けられた凸凹があって、車酔いをしてしまった私のために何度も車を止めなければなりませんでした(- -;)しばらくは韓国の田舎の道を走りたくない気持ちですが、両教団の話し合いは、互いに助け合い宣教を協力していくことへと、とても前向きな話し合いができました。心より感謝しています。

少しずつ春の温もりが感じられる風が吹きはじめています。春はすぐ近くまで来ているのですね。冬の間、土の中に眠っていた根っこや種を目覚めさせるために、雨も大地を潤わしています。神さまのお造りになった世界の被造物同士が、互いに助け合い、命を刺激し合って生きるようにされている神さまの創造のみ業に、改めて感動する季節です。訪れる春がみなさまにとってみ恵みに溢れる時でありますように、神さまの平安と祝福をお祈りいたします。

聖書 マルコによる福音書9章2節～9節

2 六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、3 服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。4 エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。5 ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」6 ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。7 すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」8 弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒にいられた。9 一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。

私の山を降りて

聖書の中には、山を中心にして展開される人々の物語がたくさんあります。

私たちが分かりやすいところを挙げてみますと、出エジプト記の3章に、モーセが召命を受ける場面があります。

モーセは、エジプトの王子として育てられますが、殺人の罪を負ってミディアンの地へ逃げてゆき、そこで結婚をして、羊を飼う仕事をしながら暮らすようになります。そのある日、羊たちを追って山の奥の方へ行きますが、その山は神の山と言われるホレブ山でした。そこで、モーセは「モーセよ、モーセよ」と呼ばれる神の声を聞くようになります。ホレ

ブ山で神さまはモーセに会ってくださったのでした。そして、エジプトへ降りて行き、エジプトの奴隷となって苦しんでいるご自分の民を導き出すように、託されます。

それ以来、モーセとイスラエルの民は、荒れ野をさ迷う際にも、山を中心に進み、山から語りかけてくる神さまのお声に導かれながら約束の地に向かって進むようになります。

山から語りかけられる神さまの声に聞くという信仰が、旧約聖書の人々の信仰にはあったのかもしれませんが。詩篇の

3章では「主に向かって声をあげれば／聖なる山から答えてくださいます」(詩篇3:5)と、詩篇記者は、山におられる神さまに祈りをささげ、祈りの答えも神さまがおられる聖なる山から与えられると祈っています。

このような信仰継承が新約聖書の時代にまでなされ、イエスさまも祈るときは山へ行かれました。オリーブの山でお祈りをなさっておられる姿をたびたび見るができますし、人々にお話をなさる際にもイエスさまは高い山に行かれます。

マタイによる福音書5章～7章は、イエスさまが山の上で教えられた、有名な「山上の説教」または「山上の教訓」と言われるものです。イエスさまは、大勢の人々を山の上に導いて教えられ、8章1節では、教えておられた山を降りられたと記しています。

また、これは来週の主日に聞く箇所でもあります。イエスさまが洗礼を受けてから荒れ野へ行かれ、そこで四十日間断食の祈りをしておられる際に、悪魔がその断食を邪魔して現れます。来週読まれるマルコによる福音書にはありませんが、平行箇所のマタイによる福音書には、悪魔が現れて、三つのことを誘惑します。その中の一つが最後の誘惑ですが、イエスさまを高い山に連れて行って、世の栄えを見せながら、もしひれ伏して私を拝むならこのすべての栄を与えよう

と言って誘惑をします。

このように、山の上は、神さまとの出会いの場でもあれば、神さまの言葉が説かれる場でもあり、祈りが聞かれる場でもあるということが分かります。神の素晴らしい栄光が輝く場であるということです。



さて、本日、イエスさまは三人の弟子たちを連れて高い山に登られました。山に登られたのは目的がありました。そこで、これからご自分の身に起きることを知るためであります。そこで、イエスさまの姿が変わり、エリヤがモーセと共に現れてイエスさまと語り合います。エリヤが現れたというのは、エリヤは預言者たちを代表する人物ですから、旧約聖書の預言を意味しますし、モーセは律法の権威者でありますから、律法を意味します。イエスさまは預言と律法からこれから起きることを聞いておられる、という風に考えられると思います。

それを知らない弟子たちは、展開される場面に恐れを感じつつも、まったく違うことを胸に抱き始めます。死んだはずのエリヤとモーセが現れたのですから、そこはすばらしい場所、神の力が働いている所と思ったのでしょう。ペトロが、語り合っておられる三人の間に口を挟み、提案をしました。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つは

あなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです」(5節)と。

誰だってこのペトロのような行動をとったと思います。イスラエルでもっとも偉大と言われるエリヤとモーセが現れ、イエスさまがご一緒に話し合っていますから、その場面を何とかして生かしたい。より良い宣教の材料として使いたいと思うわけであります。

私だったら、もっとそれ以上のことを考えていたかもしれません。そこに素晴らしい教会を建てて、インターネットを通してこの事実を広めれば、そこはすぐ有名な場所になって、観光客が大勢訪れる。祈るためにも、世界各地から訪れるかもしれないと思うわけであります。

しかし、その弟子たちを連れて、イエスさまは山を降りられます。いいえ、山の上で、「これはわたしの愛する子。これに聞け」と語りかけてくる声が、必要以上に執着している弟子たちを山から降ろして行くのでした。「これ」とは、イエスさまのことです。「これに聞け」とは、イエスに聞くということであります。イエスに聞くということは、山の下にあるイエスの生き方の中で自分を見出して生きるということであります。

彼らは山を降りて行きます。山を降りれば、彼らはイエスさまの歩まれる十字架の道に従うしかありません。病気で苦しんでいる人や、一人では負いきれない

重荷を抱えている人々や、職業柄のゆえに罪人扱いを受け、余儀なく差別を受けている人々のただ中へと入っていくイエスさまの道であります。律法学者やファリサイ派の人たちに訴えられながら、しかし、み旨を果たそうと歩まれる道です。

栄光の山を後にして、このような道へ降ろされていく弟子たちの気持ちを、私たちは代弁できるのではないのでしょうか。私たちは、何らかの形で、自分が今まで見て、悟って、感じて、最もそうだったことやそのものを、神以上に居場所としている場合が多くありましよう。神よりも、イエスよりも、自分がどれだけ悟ったのか、自分側の経験に基づいて神を捉え、イエスをも捉えようとしているのではないかと思うのです。



先週は、韓国ルーテル教会の教職者会に招かれて、そこで久しぶりに教義学を学んできました。いろいろの視点からたくさんのことを学びましたが、その多くの流れから一つの答えが出てくるわけですが、それを一言で申しますと、「**山を降りる**」と言う、この一言につながるのだと思いました。つまり、この世でどんなにたくさん学んだとして、知識が豊かで、いろいろなことを知っているとしても、それは神の知識に比べられたら、雀の涙くらいでしかないということであります。

それは、財産でも同じです。能力や名誉でも同じことです。ですから、私たちは、今知っていることや今持っているものなどに対して、意識して執着を捨てる必要があります。その執着を捨てない限り、たとえ山の下に暮らしているとはいえ、自分の心の中に築き上げている山を降りることはできません。山を降りないとするならば、そこにはイエスもいなく、もちろん、モーセもエリヤもいなく、ですから、み言葉の聞こえないところで、自分だけが小屋を建てて、過ぎ去った栄光の場面だけを何度も思い起こしながら、虚しく生きていることになります。

今回、韓国ルーテル教会の教職者会で講演をなさった先生は、ルーテル大学で三十年間教え、その前の十年間は牧会をしておられた方でしたが、とても謙虚な方でした。ジョージ・ミュラーというドイツの神学者が書いた教義学の分厚い本を翻訳されて、その一冊を四日間をかけて全部学んだわけですが、しかし、どれだけ学んで、知識が豊かであっても、決して学んだことを出さない。出すのはたった一つ、イエス・キリストの福音だけだという。

まあ、牧師の中でもいろいろあって、ドイツやアメリカに留学をしてたくさん学んできたなら、なぜか肩に力が入りすぎて硬いのです。それは、韓国だけでなく日本も世界どこでも同じことでしょ

う。またそれは、牧師だけではなく信徒も同じです。他の信徒よりもう少し神の言葉を学んだというだけで、なぜか鼻が高くなる！なぜなのでしょう？山を降りていないから。自分の山の上で仮小屋を建てて、一人で、虚しく生きているのです。誰も相手にしたがらない、本当に虚しい人生と思います。

私たちは、「これに聞け！」という神の声が聞こえてくるときに、直ちに自分をイエスの歩みの中に合わせて素早く動く者でありたいです。「これはわたしの愛する子、これに聞け！」この一声によって弟子たちは山を降りました。もちろん、しぶしぶ、イエスさまに連れられてです。しかも、降りた道が十字架の道だとは知らずに降りました。ですから、弟子たちの従う道には葛藤が多くあったことと思います。しかし、それでいいと思うのです。やがて虚しく終わって行く、過ぎ去った栄光をつかんで、仮小屋を建てて一人で暮らすような人生とは比べることもできない道が、十字架のイエスに続く道だと、私はそう思うのです。

私たちが暮らすこの山の下には、命を脅かしてくる病もあります。人間関係はどうしてこんなにも難しいのでしょうか。ときに、自分自身がファリサイ派のようになって、心が渴き果てて愛の言葉が出てこない苦しい時もある。しかし、そこには、イエスさまが共におられるところ。イエスさまが、他でもなく、私たちの生

活の、人生のただ中に、私たちの間に共に
おられるのです。イエスさまが共に
おられることが、永遠へ繋がる道であり、
復活の道であり、新しい命の道であるの
です。

私の山を降りましょう。降りるのです、
イエスさまと一緒に。そしてイエスさま
の歩まれる道をイエスさまに従って歩
みましょう。

私たちに「これに聞け！」と語りかけ
てくださり、本当の道を教えてくださる
神さま。この一週間、一人で山の上にい
るのをやめて、人々が泣いたり笑ったり
しながら一緒に暮らすところで、みんな
と一緒にいることのできる者でありま
すように。そして、そこでイエスさまの
道を示して歩むものでありますように、
私たちを導いてください。私たちの先を
歩まれる主イエス・キリストのみ名によ
って祈ります。



祈ります

2012年2月22日 灰の水曜日

マタイによる福音書 6章 16～18節

6 「断食するときには、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。偽善者は、断食しているのを人に見てもらおうと、顔を見苦しくする。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。17 あなたは、断食するとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。18 それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。」

説 教

本物とされているのだから

もし、死んで墓碑が建てられるならば、私の墓碑には、「信仰を守り抜いた人」という言葉が書かれたら嬉しい！と思います。というのは、信仰を守り抜く自信がないからですが、人が信仰を守りぬくことがどれだけたいへんなことか、聖書の中の人物の一人の使徒パウロは私たちに教えてくれます。

コリントの信徒たちに宛てている手紙の中の、1コリ9章でパウロはこのように述べています。

「わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。」(1コリ9:26～27)

立派な主の弟子としての働きを全うしているパウロでさえ、自分の信仰を守り抜く自信がないと、自分の体を打ち叩いて服従させるのだと、激しい表現を使って自分の弱さを告白している一節があります。しかし、パウロのこの一言は、彼の謙虚さを表していることに気づくのであります。そういう意味で、人の偉大さというのは、その人がどういう業績を残したのかにあるというよりは、その人が、神の前に、どれだけ謙虚な人だっ

たのかにあると、私はそう思います。

パウロは多くの教会を開拓し、大勢の人を神さまのところに導きました。そして、今私たちには聖書に残された手紙を通して、彼がどれだけ偉大な弟子であったのかを現してくれています。しかし、彼が偉大なのは、彼が何をやって何を残したのかというより、多くの物を残すその過程の中の彼自身が、神の前に謙虚な人であったと言うこと。

パウロは、自分の弱さを良く知っている人でした。彼も人間ですから、この世のものに対して欲もあったはずですし、私たちが欲しているものを普通に欲しがっていたはずですから、それらの欲に対して闘う、その闘いに積極的に挑むのだと彼は言っているのです。

このようなパウロの姿を通して見ても、私たちが信仰を持ち、それを維持する、そして最後まで守り抜くということは、自動的にできることではないということが良く分かります。時には自分を鞭打ちながら闘わなければならないときもある。時には、行きたくない道も歩き、悔しさを飲み込みながら孤独と闘うときだってある。



このような闘いのために祈りが勧められるのですが、その中でも、断食の祈りを勧めます。イエスさまも、本日の福音書で言われるように、断食の祈りについて自然に触れておられますし、それゆえ、断食の祈りは、キリスト教の歴史の中で積極的に勧められてきた祈りです。ただ、教会によって、この祈りを積極的に取り入れるか入れないかだけなのです。ですから、私たちの教会が断食で祈りを始めているということは、決して、特別なことを異例的にやっているのではなく、古い、キリスト教の習慣を取り戻しているだけのことです。一人ひとりが信仰の歩みの中で、特に忍耐が必要なが生じたとき、または教会が危機の中に置かれたときに、信仰の先輩たちは断食の祈りを通して力をいただく中で、その時、その時を乗り越えていました。

ですから、私たちが断食の祈りに加わっていく際に気をつけたいことは、教会の行事の一環として決められているから、どこかに名前を入れなくては…という形式的な姿勢で加わることはやめたいです。大宮教会で断食の祈りを実施するのは今回が初めてだと思いますが、四十日間の表を作ったのは、きっとイメージがつかめないところもあるだろうと思ったから作ったものです。そして、途中でリレーの祈りが断たれないようにするために、名前を書いていたきました。表は、ただ把握するためのものでしかありません。ですから、自分の面目を

立てるためにとか、役員だから仕方なく、というような理由で表に名前を書いておられるのでしたら、祈りに加わらなくてもいいと思います。

なぜなら、イエスさまの時代にもそのような思いで、外見的に断食を行っている人たちがいたからです。本日の福音書の箇所は、そう言う人たちが背景になっていて、そのような人に習ってはならないと、弟子たちを厳しく戒めておられるのです。つまり、他の表現で申しますと、同じ信仰の道を歩みながら偽者になるのはやめよう、ということではないかと思います。



韓国に行って南大門市場を歩いていますと、有名ブランドの偽物を買っているショップがずらりと並んでいることに気づきます。ブランドを偽造して売るとは法律で禁じられていますが、その違いがはっきりしていれば大丈夫ですね。ですから、値段も安いです。ところが、店の中に連れられて入ってみると、そこには法律に引っかかる、本物とどこが違うのか分からないものが置いてあると。ですから、値段も高いです。でも、それは本物ではなく、偽物です。偽物は本物を表面的に飾っているだけのものですね。中身が違うわけですから、素人の目では区別ができないわけです。

人間関係も似たようなことがあります。日本には本音建前があるし、私たちは、建前の付き合い方に慣れていますし、付き合いやすいです。建前の関係は、とても合理的な付き合い方だと思います。

他の言葉では、「義理」の関係も建前の関係と似ていると言えるのではないのでしょうか。建前、義理。ちなみに韓国にはこの言葉のどちらもありません。やはり国民性なのでしょう。

先週、日韓宣教協力の一環で韓国を訪れた日程の中にバレンタインデーが挟まれていたので、議長のオム先生に義理チョコを買っていきました。そして、「これ義理チョコです」と言って渡したら、「義理とは何だ？」と反問され、結局意味の分からないチョコになってしまいました。言葉がないから分からないのです。

私たちは、きっと、神さまとの関係の中にも、こういう付き合い方で臨んでいるのではないかと思うのです。この世の合理的な付き合い方で、神さまとの関係に持ち込んでいる場合が、結構多くあるのではないのでしょうか。楽だから。そして、他には、怖いところもあるかもしれません。パウロのように、内面すべて見られてひっくり返るような体験をしたら、人生すべて神さまに捕らえられてしまうかもしれないという恐れもあるから、義理の関係、または建前の関係でいいのかもしれません。または、内面的につながる人格的な関係作りということが分からないかという面もあるでしょ

う。どちらにしても、これらは、表面的にしか神さまと知り合っていないと言える関係です。

イエスさまの周りにいて、イエスさまに偽善者と言われる人たちは、神さまと平気でそういう関係作りをしていました。そして、彼らはそう言う自分たちのことを「敬虔な人」と自称していました。律法で定めていることはすべて守っていましたが、経済的に困っている人たちのためにも、律法で決められている援助法に基づき、ちゃんと献金をしていました。確かに、表面的には敬虔な人に見えます。ですから、彼ら自身は、自分たちのことを「敬虔な人」と信じ込んでいたのです。しかし、その内面では、隣人の必要に対してこれっぽっちも心を譲らない。



聖書の中で断食の祈りが進められる理由は、もちろん、自分の信仰を振り返り鍛錬するためでもあります。隣人の必要に気づき、隣人の必要を満たす働きへ積極的に用いられるためであります。

昨日、さいたま市北区で、ですからこのすぐ近くのどこかだと思いますが、餓死だと思われる状態で、三人の家族が死んで数ヶ月も経ってから見つかった、というニュースを聞きました。まさか、経済大国のこの日本で、餓死を逃れない人がいる…これは、お金がないだけのこと

でしょうか。だれも、この私も、彼らの必要に対して無関心であった。その原因があるのではないのでしょうか。もちろん、死の原因は異なってくるかもしれませんが。原因が違おうとしても、死んで数ヶ月が経っても分からなかった隣人とは、どういう関係なのでしょう。

神さまは私たちに表面的な関係づくりを求めておられません。内面からつながる関係を求めておられるのです。この世の合理的な関係は求められていないのです。一方的に神さまの方が損しながら、私たちの必要を満たそうと近づいてこられるのです。だから、心を開いて、負っている重荷を下ろして、何もかも委ねてくることを待っておられるのです。恥ずかしいとか、面目が立たないとか、優等生じゃないといけないとか、こんなの何もいらない。心から立ち返り、自分が隣人の必要に何一つ答えられない弱いものである、罪人であることを告白して、悔い改めて、ありのままを取り戻すことを求めておられるのです。

そう言う意味で、神さまと信頼関係を築くことは闘いだと思うのです。他でもなく自分との闘いです。自分と闘わない人は神の前で心を開くことはできません。自分と闘わず神さまといつまでも義理の関係作りしかできない人は、すべて、自分の身に起きることを人のせいにし、良くない責任を他者の責任にします。

自分との闘い。そこからの勝利。それ

は、具体的に申し上げるならば、与えられている二十四時間の中で、どれだけの時間を祈るために割いているのか。その中の十分の一は神さまにささげる時間であることに気づいているかどうか。それにかかっているのかもしれませんが。

どんなに自分と闘っても、私たちは信仰を守り抜くことはできません。けれど、自分との闘いの中で私たちは、自分が、本当は弱く、最後まで耐え忍び、信仰を守り抜くことなどできない者であることを知ること。だから、神さまと信頼関係を築くことを通して、そう言う自分を委ねていくこと。もっと申し上げるならば、自分の弱さを通して働かれる神さまの一方的な関わり方においてのみ自分が信仰の道を歩むことができるということを知らされることであります。そして、私たちが、本当の意味で隣人とつながり、心からつながっていられるとするならば、それは、一方的に、私の必要を満たしながら私の中で暮らしておられる神さまの憐れみ深い愛の故でありましょう。本物になりなさいと、本物に近い偽物ではなく、たとえ欠けが多くても本物として生きなさいと、神さまは私たちに本物の愛を持って訪れてくださっています。そして、今年の四旬節も私たちを本物として導き、本物としての信仰の道をしっかり見出すことができるように導いてくださることでしょう。

今日から始まった断食の祈りや、四旬節のなされるみなさまの祈りが、神さま

と内面的に、人格的につながる祈りとして導かれますように。

祈ります。

欠けの多い私たちの必要を一方向的に満たしながら、私たちを訪れ支えてくださる神さま。感謝いたします。

今日から始まる四旬節の歩みを導いてください。祈りを通して私たちが、少しでも、隣人の必要に気づくものでありますように。それを通してイエスさまの苦しみと与るものでありますように、どうか祈る者一人ひとりを支え、お導きください。

また、食べるものやその他の必要のために尊い命を失っていく人たちのことを御心に留めてくださいますように。

私たちのために十字架の道を歩まれる主イエスキリストのみ名によって祈ります。アーメン。



3月の教会のイベント & 梁のスケジュール

- 1日(木) 韓国語教室(午前11時) 祈禱会(午後7時)
4日(日) 四旬節第2主日礼拝 役員会
5日(月) 長岡(梁)
6日(火) 海外教会との宣教部会会議(梁)
7日(水) 聖書勉強会(午後1時半)
8日(木) 祈禱会(午後7時)
10日(土) 日本フェミニスト神学宣教センター定例会(午後2~4時半)
11日(日) 四旬節第3主日礼拝 シオンの会
13日(火) 関東地区役員会(梁) ジュニアユーススタッフ会(梁)
14日(水) 韓国語教室(午前11時~) 聖書勉強会(午後7時)
15日(木) 韓国語教室(午前11時) 祈禱会(午後7時)
16日(金) 浦和ルーテル学院卒業式
18日(日) 四旬節第4主日 教師会 ジュニア・ユースの集い(午後2時)
21日(水) 聖書勉強会(午後1時半)
22日(木) 祈禱会(午後7時)
25日(日) 四旬節第5主日礼拝 清掃
26日(月)~27日(火) ジュニア・ユース「けんしんナイト」@大宮
28日(水) 韓国語教室(午前11時~) 聖書勉強会(午後7時)
29日(木) 祈禱会(午後7時) 浦和ルーテル学院理事会(梁)





大宮シオン・ルーテル教会

〒 331-0814 さいたま市北区東大成町 1-229

Tel/Fax 048-663-0215

URL : <http://omiya.church.jp>

Email : himei-y@oregano.ocn.ne.jp